

女子大学生における対人認知と対人関係 に関する追跡的研究

大橋正夫 平林進¹⁾ 小川浩²⁾
鹿内啓子 林文俊³⁾ 吉田俊和⁴⁾
津村俊充⁴⁾

当初相互に未知な者から集団が構成されると、そこにおける構造はもちろん、個々の成員の間の対人関係は、最初はほとんど分化していないであろう。しかし、日時が経過し、社会的相互関係が積み重ねられるにしたがって、それらは次第に分化し、また安定したものとなっていくと考えられる。このような対人関係の成立、発展の機制や経過を明らかにすることは、対人関係の心理学の体系を確立する上で最も重要な課題の一つである。

この目的を十分に達成するためには縦断的な研究が必要である。すなわち、相当期間にわたって、成員が相互に対していく感情や認知、あるいは相互作用という形で示される外示的行動を調査・観察しなくてはならないであろう。しかし言うまでもなく、そのような資料の収集には方法上の大きな困難を伴う。このため、これまでになされてきた対人関係研究のほとんどは、横断的な性質のものであった。その主要なものは二つのタイプに分けられよう。第一はMoreno(1937)に始まるsociometricなアプローチである。そこにおいては、ソシオメトリック・テストなどによって成員間の感情的な関係が明らかにされるとともに、それに影響したと考えられるいくつかの「要因」を同定しようと試みる。しかしながら、要因の数はほとんど無数にあり、そのいくつかの効果が推定されたとしても、それらの間の交互作用や見いだされた対人関係との因果関係を明らかにすることはほとんど

不可能である。第二のタイプは、1960年代ころより始められた interpersonal attraction に関する実験的研究である(たとえば、Aronson & Linder, 1965; Byrne, 1971など)。そこでは、被験者が未知または架空の人物に対していく対人感情に影響する特定の条件の効果が、統制された条件下で確かめられる。第一のタイプのものが実態調査的であるのに対し、これは仮説検証的な性格をもっている。したがってその条件が対人関係成立の契機となるか否かは確認されるが、多数考えられる諸条件の相乗的ないし相殺的效果については、明らかにされないままである。そして、両方のタイプに共通した欠点は、対人関係の推移に影響する条件をなんら示すことができないことである。

対人関係に関する縦断的研究の数少ない例の一つは、男子大学生の集団に対して16週間にわたってさまざまな資料を収集し、分析したNewcomb(1961)のものである。彼は当初相互に未知な17名の学生を一つの寮の中に居住させ、他の各成員に対する好意度、他の各成員から寄せられたと推測する好意度、寮生に共通して重要ないくつかの対象に対する態度などを継続的に調査した。また、被験者のパーソナリティ要因として、権威主義的態度、同調性、達成欲求、親和欲求などについても資料を集めた。Newcombのこの研究の基本的目的は、彼のいわゆるA-B-Xモデル(Newcomb, 1953)を対人関係の場において検証することであった。このモデルは次のようにパラフレイズすることができる。人Aと人Bが、2人にとっての共通な態度対象Xに対して類似した態度を持っている(すなわち、2人の間にXに関して Co-orientationが存在する)ならば、2人の間には相互にポジティブな対人的態度が生れるであろう。2回にわたる現場研究の結果は、このモデルによる予測を支持するものであった。

さらにNewcomb(1963)は、モデルの適合度は、集団生活の初期と3か月が経過したあととでは、基本的に変わらないことを明らかにした。A-B-Xモデルはバラン

* 本論文は日本心理学会第42回大会で発表したものに加筆したものである。データの処理にあたっては、名古屋大学大型計算機センターのFACOM 230-60/75、および愛知県がんセンター研究所のOKITAC 4500によった。

- 1) 名古屋女子大学家政学部助教授
- 2) 愛知県がんセンター研究所疫学部研究員
- 3) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程) 教育心理学専攻
- 4) 名古屋大学大学院教育学研究科研究生 教育心理学専攻

ス理論 (Heider, 1946, 1958) の一変種とみることができ、対人関係の場におけるバランス仮説の適合度が時間とともにどのように変わるかを分析したものに、大橋 (1958) の研究がある。大橋は、 o の q に対する態度の p による認知がバランス仮説に合致してなされる程度は、相互に未知な者から構成された中学校 1 年生の学級において、学級編成後 4 週間経過した時点と、4 か月後とでは基本的に同じであることを見いだした。しかし、初期においては $o \rightarrow q$ の態度を p が誤って認知することによってバランスに到達することが多いのに対し、のちには正確に認知することでバランスが得られるようになっていくことが明らかにされた。つぎに、二者関係における対人関係と対人関係の認知の間の関係としては、相応性 (congruency) と呼ばれる顕著な傾向があることが知られている (Tagiuri, Blake & Bruner, 1953)。すなわち、人の他者に対する態度と、彼の認知する自分に寄せる他者の態度の間には、一致するような強い傾向が存在する。この傾向が時間の経過とともにどのように変化するかをみるため、小川・藤原 (1962) は、高校生の学級内の他者に対する好意度 ($p \rightarrow o$) と他者の自分に対する好意度の認知 ($p \leftarrow o$) を、1 か月の間隔をおいて 2 度測定した。その結果、相応性の傾向は第 2 回目において強くなることがわかった。また彼らは、相応性が生ずる機制についても検討し、 $p \rightarrow o$ が $p \leftarrow o$ を規定する投射的過程と、逆に $p \leftarrow o$ が $p \rightarrow o$ を規定する投入的過程がともにみられることを示した。

ところで、2 人の人の間にどのような対人関係が成立・発展するかにとって、両者のパーソナリティは極めて大きな役割を演ずる。ただしこのパーソナリティ要因は、客観的実在としてのそれではなくて、双方にとっての主観的実在としてのそれである。それは社会的相互作用は常に社会的知覚によって媒介されるからである。ことに対人関係の初期においては、相手の行動をそのパーソナリティにどのように帰属するか、換言すれば相手のパーソナリティをいかに認知するか、が 2 人の間に成立ないし発展していく対人関係を理解し予測する上で極めて重要である。にもかかわらず、この問題についての組織的研究はまだほとんど着手されていない現状である。

比較的限られた手がかりに基いてなされる他者のパーソナリティの判断は印象形成と呼ばれている。周知のように、印象形成過程の研究に実験的なアプローチを導入したのは Asch (1946) であった。彼は数個の特性 (形容詞) によって記述される架空の人物について形成されるパーソナリティの印象を、自由記述法およびチェック・リスト法によって研究した。それは多くの重要な知見をもたらすとともに、研究者を刺激して印象形成につい

での多数の実験的研究を生む端緒となった。しかしながら、対人関係の研究という観点からは、それは現実の場面から遊離した抽象的な研究である、という批判を免れなかった (Kelley, 1950)。1960年代に入ると、パーソナリティの印象を好-悪という単一の次元 (評価的次元) のみからとらえ、それを実験者が提示するいくつかの特性に対する評価値の一次結合によって予測しようとする、いわゆる情報統合モデル (Anderson, 1962) が提唱され、その妥当性をめぐって華々しい論争が展開されるとともに、非常に多くの研究が公刊されるようになった。しかしそれらの研究のほとんどは、Asch (1946) のオリジナルの研究よりもいっそう現実の対人関係から遊離している、という批判を甘受せねばならなかった。

われわれも情報統合モデルの検証を当面の目的とする研究をいくつか報告してきた (大橋ほか, 1971; 大橋ほか, 1972b)。しかしわれわれの目的は、Anderson (1974) のように、印象形成のデータを材料として判断過程の一般的性質を明らかにすることではない。したがって、同じく言語的刺激を用いるにしても、印象が個々の特性の値の代数的結合としていかに予測されるかを数学的に分析することよりも、質問紙法や面接法を用いて、印象に関する情報統合の過程をより質的に分析することにより強い関心を向けてきた (大橋ほか, 1973; 1975; 長田ほか, 1975)。また最近では、各個人のもつ implicit な personality theory を解明するための第一歩として、人が他者の相貌特徴と性格特性との間に仮定している関連性について、一連の研究を行ってきた (大橋ほか, 1976; 1977; 林ほか, 1977; 林, 1978)。さらに、顔写真を手がかりとして形成されるパーソナリティの印象についても研究を進めている (大橋ほか, 1972a; 1973)。

さてここで、人が他者のパーソナリティを認知するさいにどのような次元を用いるか、という問題に関するこれまでのいくつかの研究をみてみよう。Levy & Dugan (1960) は顔写真を用いたパーソナリティの評定資料を因子分析し、そこから、一般的評価バイアス (general evaluative bias)、有害性 (harmfulness)、信頼性 (dependability)、愛想の良さ (affability) と解釈される 4 因子を抽出している。また飯島 (1961) は、人のパーソナリティ特徴を表わす 30 組の特性形容詞対により、相互に未知な大学生に相手の印象を評定させ、その資料を因子分析して、社会的活動性、魅力性、道徳性の 3 因子を見いだしている。さらに、Hastorf ら (1965) は、ニューヨークの下層階級の子どもたちを 2~3 週間のキャンプに参加させ、期間中に各成員が相手をどのように認知するかを、自由記述法によりデータを収集して分析している。

しかしながら、これらの研究が扱ったのはある一時点におけるパーソナリティ認知であり、そこで明らかにされた次元が、対人関係のすべての時期においてひとしく認められるか否かについては一切不明である。この点に関して一つの示唆を与えるのはPassini & Norman(1966)の研究である。彼らは、認知者が刺激人物を熟知している場合と全く知らない場合に分けてパーソナリティの評価データを別々に因子分析したところ、類似した因子構造が得られたと報告している。すなわちいずれの場合にも、外向性(extroversion)、温厚性(agreeableness)、良心性(conscientiousness)、情緒安定性(emotional stability)、文化(culture)の5因子が得られた。

以上のように、その初期から相当期間にわたり、ある対人関係がどのように発展していくかについて、われわれはまだあまり知らない。パーソナリティの認知についても同じことが言える。いわんや、この両者の関係を明らかにしようとした研究は、われわれの知る限りでは、これまでにまったく報告されていない。そこでわれわれは、対人関係のダイナミクスを解明するための一助として、N女子大学の某学科に入学した学生に対し、入学後約4週間経過した時期から始めて、2~3週間の間隔で数回にわたり各種の調査を実施し、そのデータを分析することにした。なお本研究は、将来実施すべく計画中のより組織的な追跡研究のための、予備的研究として計画されたものであり、探索的研究という色彩が濃厚である。具体的な目標をあげると次の通りである。

1. クラスの成員間の対人感情はどのように変化していくか、またTagiuriら(1958)のいわゆる正確性・相互性・相応性などの測度は時間の経過に伴ってどのように変化するか、個人の選択地位はどの程度安定しているか、などを明らかにすること。このためには、クラス内の他の成員に対する好意度と、他の成員の自分に対する好意度の認知を測定する。このほか、三者関係の認知に関するデータも必要と考えたが、被験者の負担が過大となることを避けるため、今回は割愛した。

2. 他者のパーソナリティ認知がどのように変化するかを明らかにすること。このためには、(1)パーソナリティの自己評価、(2)パーソナリティの他者評価、(3)他者から認知されていると推定する自己のパーソナリティ評価の3種のデータを必要とする。ただ、大学生の場合、自己概念はかなり安定していると考えられるので、(1)のデータは1回に限り収集する。また、時間的制約から、(2)と(3)は全級友に関してデータをとることはせず、同じ特定の成員に関してのみ繰り返し収集することにする。

3. 他者に対する好意度の評価とパーソナリティ認知の関係を明らかにすること。具体的に言えば、パーソナ

リティ認知のデータから好意度評価の結果がどの程度予測可能であるかを明らかにすること。

4. 上記のデータを背景的数据の関係を明らかにすること。すなわち、家族構成、出身高校、所属クラブ、所属ゼミナール等の資料が、対人関係と対人認知に対してどのように関係しているかを明らかにすることである。ただし、本報ではこの分析の結果は省略してある。

方 法

1. 被調査者

昭和47年度にN女子大学某学科に入学した98名。専攻により3クラスに分けられている。各クラスの在籍者数は、Aクラス30名、Bクラス20名、Cクラス48名。ただし各回の調査とも若干名の欠席者があったため、主な分析の対象にしたのは、そのうち各回の資料のそろっている60名のみである。

2. 調査の内容

(1) パーソナリティの自己評価：25項目から成る7点両極尺度。これは飯島(1961)が用いた30項目のうち、因子負荷が特定の因子に限定されない5項目を除いたもので、その内容は表2に示されている。

(2) パーソナリティの他者評価：(1)と同一の尺度。ただし第2回以降は評価の確信度(4：まったく確信~1：まったく確信なし)もあわせ質ねた。各回とも同じ4名の刺激人物(以下SPと略記する)を評価させた。うち2名は評価者(以下Sと略記)と出席簿で近く、2名は遠くの位置にある者からランダムに選んだ。また被験者は4名の級友のSPとなるようにしたが、相互にSPとなることは原則としてなかった。

(3) パーソナリティの他者評価の推定：(2)と同一の尺度により、各SPが(もし自分を他者評価の対象として評価したとしたら)自分を評価するであろうように推定させる。この資料は今回は分析の対象としない。

(4) ソシオメトリック評価：クラスの全成員の名簿を与え、7(ぜひ親しくしていきたい)~1(絶対親しくしていきたくない)の7段階で評価させる。各段階に評価すべき人数は制限しなかったが、特定の段階に評価が偏ることのないようにと教示した。

(5) ソシオメトリック認知：クラスの各成員が(4)において自分をどの段階に評価したかを推測させる。

3. 調査の期日と方法

調査はクラス単位で集団的に実施された。ただし当日の欠席者のうち、数日以内に補足できた者については、後日個別に実施した。

最初のうちは級友の顔と名前が一致しない者があるかもしれないと考えられたので、写真帖を手渡して同定の

手助けとした。

調査の期日は、クラスにより多少の差はあったが、おおよそ表1に示す通りである。

表1 調査の時期と内容

回	期 日	調 査 の 内 容
T ₁	5 / 8 前後	パーソナリティの自己評定・パーソナリティの他者評定・パーソナリティの他者評定の推定
T ₂	5 / 26 前後	パーソナリティの他者評定・パーソナリティの他者評定の推定・ソシオメトリック評定・ソシオメトリック認知
T ₃	6 / 13 前後	パーソナリティの他者評定・パーソナリティの他者評定の推定・ソシオメトリック評定・ソシオメトリック認知
T ₄	7 / 3 前後	パーソナリティの他者評定・パーソナリティの他者評定の推定・ソシオメトリック評定・ソシオメトリック認知
T ₅	9 / 4 前後	パーソナリティの他者評定・パーソナリティの他者評定の推定・ソシオメトリック評定・ソシオメトリック認知

結 果

I パーソナリティの認知

Sは各回とも同じ4名のSPのパーソナリティの他者評定をした。各段階の評定に1～7の得点を与え、これに基いて以下のような分析をした。

1. パーソナリティ認知の因子構造

T₁～T₅の各時点ごとに主因子法により因子分析を行ない、固有値1.0以上を基準として因子を抽出したところ、いずれも4因子が得られた。これをバリマックス回転した結果が表2に示してある。ここでは、同じ因子への負荷量の高いものがまとまるように尺度の順序を入れかえ、また負荷量の大きいもの(0.5以上、表2ではゴチックで表示)が正となるようにいくつかの尺度の両極も入れかえてある。

この表を見てまず気づくことは、各時点における因子構造(因子負荷量のパターン)が非常に類似していることである。因みにTuckerの因子類似性係数を求めたところ、0.789～0.995の範囲にあった。このことから、パーソナリティの他者認知の因子構造は、この尺度を用い

表2 各時点におけるパーソナリティ認知の因子構造

尺 度	因 子 時 点	第 I 因子：活動性						第 II 因子：親近性					
		T ₁	T ₂	T ₃	T ₄	T ₅	Σ	T ₁	T ₂	T ₃	T ₄	T ₅	Σ
内 向 的 な-外 向 的 な		.83	.86	.90	.88	.86	.87	-.12	-.02	.08	.03	-.01	-.02
非 社 交 的 な-社 交 的 な		.82	.82	.82	.80	.85	.82	.07	.00	.07	.15	.02	.05
不 活 発 な-活 発 な		.76	.83	.81	.77	.86	.81	.06	-.04	.14	.17	.07	.06
無 口 な-お しゃ べ り な		.81	.83	.77	.71	.83	.81	-.07	.06	.05	.26	.03	.06
消 極 的 な-積 極 的 な		.78	.75	.78	.81	.73	.78	-.07	.01	.00	.08	.03	-.01
静 か な-う る さ い		.72	.82	.76	.70	.72	.76	-.16	-.09	-.07	.15	-.14	-.07
暗 い-明 る い		.77	.74	.66	.47	.70	.70	.41	.38	.55	.66	.45	.49
い ん う つ な-ほ が ら か な		.74	.75	.65	.41	.67	.68	.40	.37	.53	.68	.46	.49
ユ-モアのない-ユ-モアのある		.70	.72	.54	.40	.59	.63	.24	.23	.50	.61	.24	.36
地 味 な-派 手 な		.65	.58	.58	.69	.59	.61	-.27	-.29	-.35	-.24	-.36	-.30
悲 観 的 な-楽 観 的 な		.64	.67	.55	.36	.63	.60	.30	.27	.41	.67	.31	.40
病 的 な-健 康 な		.58	.56	.62	.45	.60	.57	.15	.25	.39	.33	.31	.28
冷 い-暖 い		.20	.18	.12	-.02	.17	.15	.71	.76	.75	.70	.76	.75
人 の わ る い-人 の よ い		.19	.10	.02	-.05	.09	.09	.62	.67	.78	.71	.66	.69
感 じ の わ る い-感 じ の よ い		.08	.11	.17	.00	.10	.09	.53	.69	.67	.56	.69	.64
き ら い な-す き な		.13	.18	.16	.00	.09	.12	.57	.62	.65	.51	.57	.61
不 親 切 な-親 切 な		-.08	.01	.06	-.07	.08	.01	.59	.50	.62	.61	.70	.60
ひ ね け れ た-す な お な		-.05	-.10	-.06	-.04	-.02	-.04	.59	.68	.54	.47	.65	.59
魅 力 の な い-魅 力 の あ る		.15	.23	.28	.14	.23	.22	.15	.15	.26	.31	.28	.25
に ぐ ら し い-か わ い い		.07	.15	.14	.10	.16	.13	.37	.29	.39	.28	.36	.36
み に く い-美 し い		-.05	.00	.10	.00	.07	.03	.03	.08	.17	.16	.26	.16
ふ ま じ め な-ま じ め な		-.40	-.40	-.33	-.29	-.24	-.35	.30	.24	.32	.13	.45	.28
た よ り な い-し っ か り し た		.20	.36	.30	.26	.34	.28	.21	.25	.30	.31	.36	.27
ざ つ な-こ ま や か な		-.43	-.39	-.16	-.09	-.16	-.27	.25	.06	.20	.04	.17	.15
不 潔 な-清 潔 な		-.02	-.01	.19	.06	.23	.07	.35	.32	.34	.38	.37	.36
説明される分散(%)		50.2	55.4	57.1	51.9	57.0	54.6	36.3	28.2	27.9	33.7	31.1	31.8

注) ゴチック体の数値は、.50以上の負荷量を示す。

表2 (つづき)

尺 度	因 子 時 点	第Ⅲ因子：魅力性						第Ⅳ因子：誠実性					
		T ₁	T ₂	T ₃	T ₄	T ₅	Σ	T ₁	T ₂	T ₃	T ₄	T ₅	Σ
内 向 的 な-外 向 的 な		-.02	.05	.05	.02	.05	.03	.02	.07	.05	-.13	.01	.02
非 社 交 的 な-社 交 的 な		.16	.17	.24	.13	.10	.16	.01	.08	.08	.01	.15	.07
不 活 発 な-活 発 な		.01	.07	.13	-.01	.11	.06	.27	.27	.16	.09	.16	.21
無 口 な-お しゃ べ り な		-.09	-.05	.09	.08	-.01	-.02	-.06	-.11	-.31	-.37	-.31	-.22
消 極 的 な-積 極 的 な		-.06	.02	.04	-.05	.06	.00	.26	.34	.34	.15	.29	.28
静 か な-う る さ い		-.24	-.05	-.05	-.13	-.05	-.11	-.19	-.23	-.35	-.47	-.39	-.31
暗 い-明 る い		.15	.20	.07	.17	.19	.14	-.04	-.13	-.01	-.11	-.22	-.10
い ん う つ な-ほ が ら か な		.21	.22	.17	.09	.21	.16	-.03	-.04	-.05	-.05	-.17	-.07
ユ ー モ ア の な い-ユ ー モ ア の あ る		.08	.02	.23	.14	.08	.09	-.16	-.03	-.14	-.07	-.14	-.11
地 味 な-派 手 な		.17	.26	.20	.05	.05	.16	-.32	-.15	-.14	-.18	-.05	-.18
悲 観 的 な-楽 観 的 な		.14	.13	.05	.07	.18	.11	-.01	-.24	-.05	-.12	-.14	-.13
病 的 な-健 康 な		.05	.20	.04	.18	.20	.13	.18	.03	.11	.13	.07	.11
冷 い-暖 い		.07	.13	.10	.23	.23	.12	.14	.00	.15	.23	-.06	.10
人 の わ る い-人 の よ い		.36	.07	.21	.27	.22	.21	.03	.05	.07	.17	.02	.07
感 じ の わ る い-感 じ の よ い		.57	.47	.31	.42	.48	.45	.22	.03	.21	.35	.08	.18
き ら い な-す き な		.59	.47	.30	.42	.47	.45	.09	-.05	.17	.30	.14	.11
不 親 切 な-親 切 な		.11	.05	.14	.19	.17	.12	.13	.21	.22	.22	.17	.19
ひ ね け れ た-す な お な		.34	.23	.29	.40	.36	.31	.19	.15	.16	.30	.15	.19
魅 力 の な い-魅 力 の あ る		.76	.72	.76	.78	.77	.76	-.06	.03	.06	.11	.03	.01
に く ら し い-か わ い い		.71	.70	.74	.80	.83	.74	.00	-.04	.07	.15	.02	.05
み に く い-美 し い		.70	.77	.78	.71	.75	.73	.12	.10	.11	.23	.09	.13
ふ ま じ め な-ま じ め な		.26	.13	.09	.18	.12	.15	.43	.56	.59	.60	.40	.55
た よ り な い-し っ か り し た		.07	.04	.19	.17	.23	.12	.61	.58	.55	.49	.34	.53
ぎ つ な-こ ま や か な		.39	.24	.42	.27	.35	.34	.32	.29	.43	.49	.40	.40
不 潔 な-清 潔 な		.43	.46	.41	.35	.44	.42	.39	.12	.37	.36	.27	.30
説明される分散(%)		8.1	9.2	8.9	9.1	6.8	7.6	5.4	7.2	6.2	5.4	5.2	5.9

る限り、時点を越えてはほぼ安定しているということが出来る。換言すれば、相互に知り合ってから4週間後から5か月後にかけて、級友のパーソナリティを見るさいの枠組はほぼ一定であることがわかった。当然のことながら、5回の調査のデータを合計した場合(表2ではΣの欄に示されている)の因子構造は各回の構造に非常に類似したものとなっている。

つぎに抽出された4因子の解釈を試みよう。第Ⅰ因子は、「内向的な-外向的な」、「非社交的な-社交的な」、「不活発な-活発な」などの尺度の負荷量が高いことから、〈活動性〉の因子と解釈できる。12尺度がこの因子の負荷量が高く、そのうち少数の例外を除くと、他の因子の負荷量はほとんどが高くない。つぎに第Ⅱ因子は、「冷い-暖い」、「人のわるい-人のよい」などでの負荷量が高いことがみられるので、〈親近性〉の因子と考えることができる。また第Ⅲ因子の負荷量の高い尺度には、「にくらしい-かわいい」、「魅力のない-魅力のある」、「みにくい-美しい」が含まれていることから、〈魅力性〉の因子と解釈するのが適当であろう。最後に第Ⅳ因子は、他の因子にくらべてやや不安定のようなのであるが、「ふまじめな-まじめな」、「たよりない-しっ

かりした」の2尺度の負荷量が高く、これを〈誠実性〉の因子と命名しても差支えないものと思われる。第Ⅱ因子、第Ⅲ因子および第Ⅳ因子に高く負荷する尺度数は、それぞれ6、3および2である。これに対して、いずれの因子にも高く負荷しない尺度は、「ぎつな-こまやかな」および「不潔な-清潔な」の2尺度である。全体としてはかなり整合的な単純構造が得られたといつてよいであろう。4因子のうち、第Ⅱ、第Ⅲ、および第Ⅳ因子はいずれも評価的側面を表わす因子と考えられるが、第Ⅱおよび第Ⅲ因子は個人的好ましさを、また第Ⅳ因子は社会的望ましさを含意しているとみることができよう。

2. パーソナリティ認知の変化

(1) 因子得点の変化 他者のパーソナリティ認知に関する因子構造は時点によってほとんど変化せず、安定していることが明らかにされた。そこで、5回分のデータをコミにして因子分析した結果にもとづき、因子得点を算出した。

ここで得られた因子得点は、ある時点であるSがあるSPを評定したデータが、前記の4因子から構成される認知空間内のどこに位置しているかの座標の集合を表わしている。したがって、得られた因子得点について、因

子×時点ごとの平均値を求めれば、そこから、認知空間の中にプロットされた全SPの時点ごとの平均点位置(すなわち重心)の推移に関するベクトルを知ることが可能となる。表3はこのような因子×時点ごとの因子得点の平均値と標準偏差を示したものである。

表3 各時点における因子得点の平均

時点 因子	T ₁	T ₂	T ₃	T ₄	T ₅
活動性	-.25 (1.07)	-.10 (1.05)	.15 (0.92)	.09 (0.85)	.11 (0.91)
親近性	-.19 (0.98)	-.06 (0.91)	.09 (0.91)	.09 (0.92)	.07 (0.86)
魅力性	-.08 (0.98)	-.06 (0.91)	.01 (0.90)	.05 (0.84)	.08 (0.87)
誠実性	.21 (0.89)	.03 (0.86)	-.06 (0.88)	-.08 (0.79)	-.10 (0.78)

()内は標準偏差

各因子における因子得点の平均値の時系列的変化の有意性を分散分析によって検定したところ、〈活動性〉、〈親近性〉、および〈誠実性〉の3因子においてそれぞれ1%水準で有意であった。変化の方向をみると、〈活動性〉および〈親近性〉では時点を追うにしたがって平均は上昇するが、T₁~T₃の間で変化が著しく、T₃以降の変化は小さいことがわかる。これに対して、〈誠実性〉では逆に時が経過するにつれて減少している。ただしここでもT₃以降の変化が小さいことは前の2因子の場合と同じである。また〈魅力性〉では平均値は次第に上昇する傾向がみられるが、この変化が有意ではない。

(2) 平均評定値の変化 因子得点ではなくて、尺度の評定値そのものの変化をみるならば、同様の傾向が見いだされるはずである。図1は4因子のそれぞれを主として負荷する尺度群(以下たんに尺度群という)ごとにその平均評定値を時点ごとに示したものである。分散分析した結果によると、〈誠実性〉の尺度群では5%、他の因子の尺度群では1%水準で変動は有意であった。変化のパターンは、当然のことながら、表3に示される因子得点のパターンと類似していることがわかる。

さて、〈親近性〉および〈魅力性〉において因子得点や尺度群の平均評定値が上昇していくことは、社会的相互作用が重ねられるにつれて他者に対する好意度が増すことを物語っていると考えられる。これは従来の研究の知見と軌を一にする。しかし〈誠実性〉のそれらが時間とともに減少する傾向は、どのように解釈すべきか、現在のところでは明らかでない。

(3) 因子得点の時点間の相関 各因子ごとに、因子得点の時点相互の間の相関係数を求めたのが表4である。

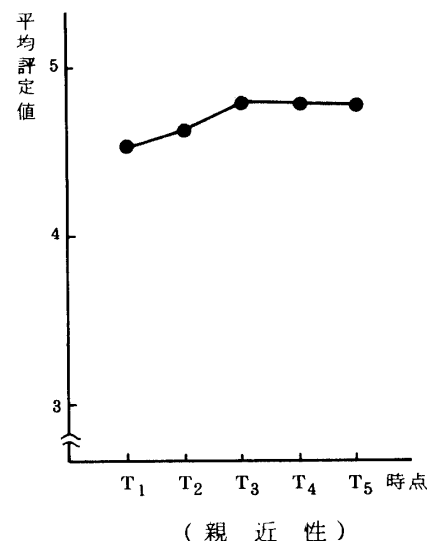
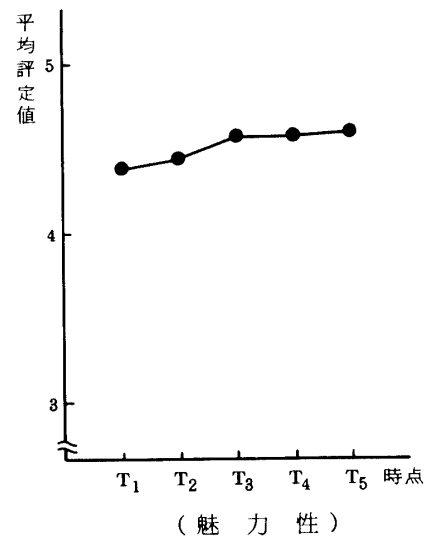
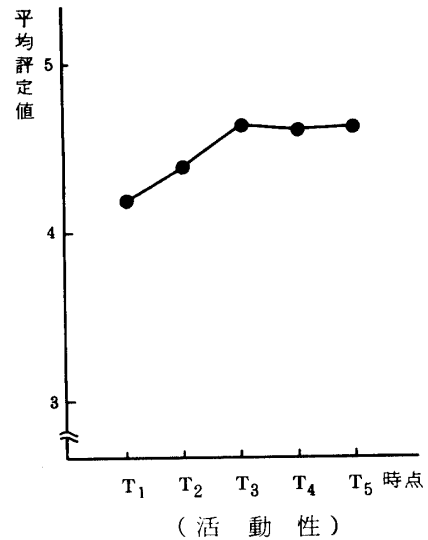
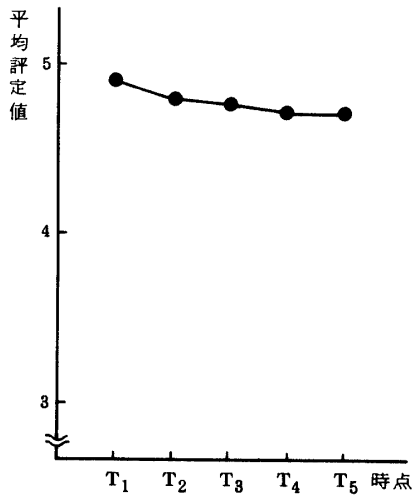


図1 各尺度群における平均評定値の推移



(誠実性)

図1(つづき)

これを見ると、当然のことながら、近接した時点相互の間では相関は高く、間隔が開くにしたがって低くなっている。しかし間隔は同じでも、T₁~T₃相互の間よりも、

表4 各因子得点の時点間の相関

(活動性)

	T ₁	T ₂	T ₃	T ₄	T ₅
T ₁					
T ₂	.73				
T ₃	.59	.71			
T ₄	.56	.65	.86		
T ₅	.52	.67	.86	.87	

(親近性)

	T ₁	T ₂	T ₃	T ₄	T ₅
T ₁					
T ₂	.47				
T ₃	.25	.46			
T ₄	.17	.51	.79		
T ₅	.21	.46	.75	.80	

(魅力性)

	T ₁	T ₂	T ₃	T ₄	T ₅
T ₁					
T ₂	.57				
T ₃	.40	.66			
T ₄	.37	.63	.83		
T ₅	.27	.59	.78	.84	

(誠実性)

	T ₁	T ₂	T ₃	T ₄	T ₅
T ₁					
T ₂	.47				
T ₃	.24	.46			
T ₄	.20	.46	.70		
T ₅	.15	.44	.69	.74	

T₃~T₅相互の間で相関はより高い。これはあとの方になると他者のパーソナリティ認知が安定したものとなってくることを示唆する。その頃には、パーソナリティの印象というよりは、パーソナリティの理解が反映されているのであろう。

また因子による差異をみてみると、相関は<活動性>において他の因子よりもかなり高い。最も離れたT₁とT₅の間でも.52という高さである。これはパーソナリティ認知が活動性の次元においてより安定性をもっていること、換言すれば、この次元において他者のパーソナリティ認知がより容易になされることを意味しているのであろう。このことは、表5に示されるように、評定の確信度が他の尺度群よりも<活動性>の尺度群においてより高いことによっても裏書きされている。ただし、時点T₃以降では他の尺度群でも確信度が高くなっているため、差は小さくなっている。なお時点T₁においては確信度のデータは取られていない。

表5 パーソナリティ評定の確信度の平均

()内は標準偏差

	活動性	親近性	魅力性	誠実性
T ₂	2.41 (0.83)	2.34 (0.80)	2.27 (0.78)	2.34 (0.83)
T ₃	2.65 (0.74)	2.61 (0.73)	2.50 (0.72)	2.55 (0.73)
T ₄	2.75 (0.74)	2.72 (0.75)	2.55 (0.74)	2.71 (0.76)
T ₅	2.65 (0.73)	2.62 (0.70)	2.53 (0.72)	2.57 (0.72)
全体	2.61 (0.77)	2.57 (0.76)	2.46 (0.75)	2.54 (0.77)

(4) 隣接時点間の評点の一致率 上では因子得点の相関を手がかりとしてパーソナリティの他者評定の安定性をみた。しかし認知の安定性は、より直接的に、2回の評定の一致という形で確認することができる。すなわち、時点T_iにおいてある段階に評定されたケースのうち、時点T_{i+1}において同じ段階に評定されたものの割合をみればよい。尺度群別、評定段階別に時間の推移を追

ってそれを表わしたのが図2である。

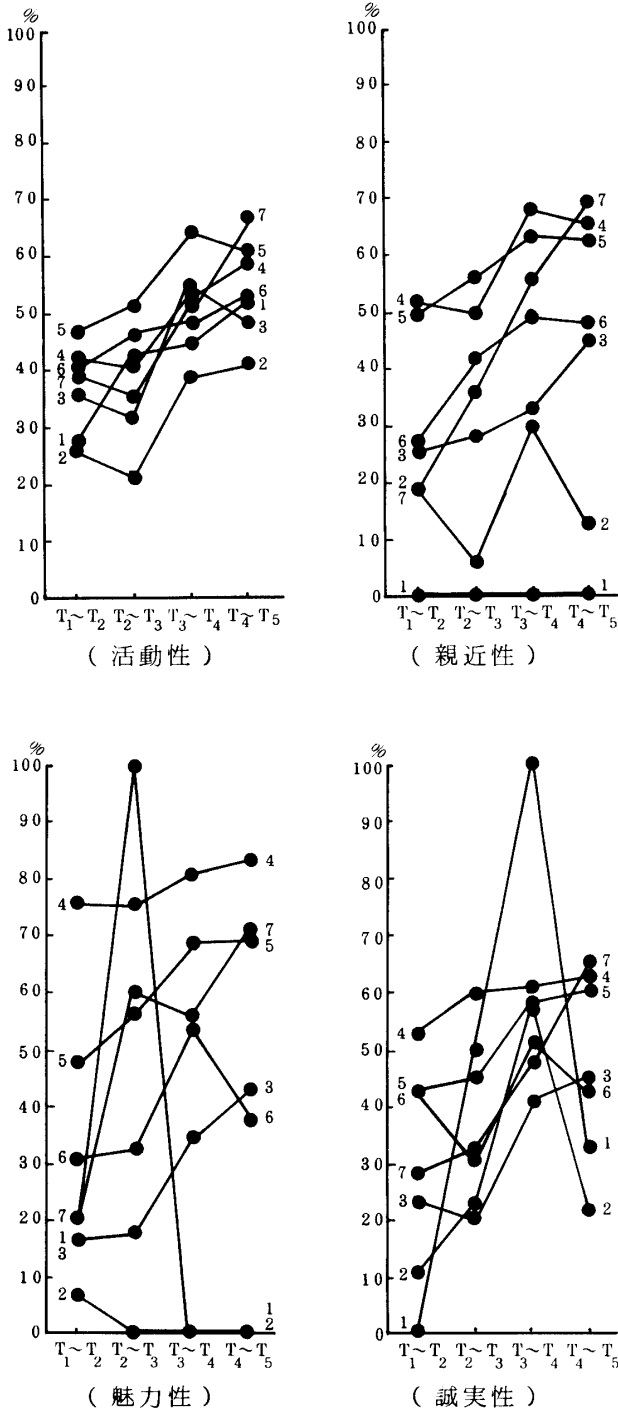


図2 2時点間で一致した評価の割合

これを見ると、各尺度群ともほとんどの評価段階において時間の推移とともに一致率は次第に高くなっていることがわかる。われわれが調査した期間内では、認知の安定性が増加し続けているわけである。

つぎに尺度群別にみると、〈活動性〉が他と著しく異なっていることに気づく。他の尺度群では4の段階(中性点)での一致率が他の段階でのそれより高いのに、この尺度群ではそれほどでもない。また、他の尺度群では1とか2のような低い段階での一致は(ことに初期において)ほとんどみられないのに対し、ここではかなりの一致率である。率ではなくて一致した度数でみると、他の尺度群よりもずっと多い。このことは、〈活動性〉の次元では認知は早い時点で分化し、かつ安定するということを意味しているといえよう。

〈活動性〉と対照的なのは〈魅力性〉の尺度群であろう。ここでは4の段階での一致率が極端に高くなっている。表4に示されているように、因子得点の時点間の相関が〈活動性〉について高いのはこの尺度群である。しかし、図2から推定すると、この相関の高さは真の安定性を示しているというよりは、response set にもとづくバイアスによるものと思われる。このことは表5に示された確信度に関する結果によっても裏書きされている。すなわち、〈魅力性〉においてそれはもっとも低いのである。このことから、この次元における中性点への評価は、「わからない」という反応をある程度含んでいると考えられる。あるいは、ここに含まれる尺度が「みにくい-美しい」、「魅力のない-魅力のある」など、もっとも直接的に評価的なものであるため、断定を差控えようという構えが働いたかもしれない(表7も参照)。

3. パーソナリティ認知の正確さ

パーソナリティの自己認知が常に veridical であるとかぎらないことは勿論であるが、ここでは他者認知の正確さを決定するための基準として、Sによる自己評価を用いることにする。

(1) 認知の正確さの時間的推移 認知の正確さを表わす尺度としてDスコアを尺度群ごとに求めた。Dスコアは次の式で計算する。

$$D = \sqrt{\frac{1}{n} \sum d^2}$$

ここに、dはある尺度上でのSPに対する評価値とそのSPの自己評価値の差、nはその群に含まれる尺度の数である。この値が小さいほど認知は正確であることを意味する。表6は各尺度群別、および25尺度全体について、時点ごとにこの平均値と標準偏差を求めたものである。

表を見ると、25尺度全体では、T₁~T₃において認知の正確さは増大していく傾向があるが、T₃以降では変化はみられないようである。尺度群ごとにみると、〈活動性〉と〈誠実性〉では、全体の尺度と同じく、T₁~T₃で正確さは増し、それ以降は変化がない。これに対

表6 パーソナリティ認知の正確さ(Dスコア)の平均

()内は標準偏差

尺度群	N	T ₁	T ₂	T ₃	T ₄	T ₅
活動性	12	1.52(0.11)	1.46(0.09)	1.36(0.07)	1.36(1.08)	1.37(0.06)
親近性	6	1.61(0.44)	1.55(0.48)	1.58(0.52)	1.58(0.50)	1.58(0.52)
魅力性	3	1.03(0.14)	1.03(0.16)	1.13(0.13)	1.09(0.16)	1.13(0.17)
誠実性	2	1.59(0.09)	1.46(0.03)	1.39(0.01)	1.40(0.02)	1.41(0.04)
その他	2	1.51(0.11)	1.36(0.10)	1.34(0.04)	1.38(0.06)	1.38(0.05)
全体	25	1.49(0.29)	1.42(0.30)	1.39(0.29)	1.38(0.30)	1.40(0.30)

表7 中性点への評定の割合(%)

		活動性	親近性	魅力性	誠実性
他者評定	T ₁	24.47	37.82	56.86	25.42
	T ₂	25.00	35.04	55.74	30.25
	T ₃	24.61	31.16	53.92	35.29
	T ₄	24.09	33.05	52.94	32.35
	T ₅	25.42	33.19	52.66	31.51
自己評定		23.75	37.50	68.89	37.50

表8 個人別にみたDスコア

	時点	最大値	最小値	中央値	レンジ	平均値	分散
評定者の場合	T ₁	2.32	1.04	1.44	1.28	1.48	0.10
	T ₂	2.03	0.84	1.34	1.19	1.38	0.08
	T ₃	2.29	0.88	1.26	1.41	1.34	0.10
	T ₄	2.08	0.73	1.29	1.34	1.35	0.08
	T ₅	2.13	0.93	1.28	1.20	1.35	0.08
N = 46	全体	2.02	0.91	1.34	1.11	1.38	0.06
被評定者の場合	T ₁	2.61	0.86	1.56	1.74	1.52	0.10
	T ₂	2.58	0.93	1.40	1.66	1.40	0.11
	T ₃	2.40	0.85	1.33	1.54	1.37	0.10
	T ₄	2.34	0.73	1.37	1.60	1.37	0.08
	T ₅	2.35	0.90	1.35	1.44	1.38	0.08
N = 44	全体	2.46	1.00	1.34	1.46	1.41	0.08

して<親近性>では他に比べて一貫して正確さが低く、また時点による変化はほとんどみられない。つぎに<魅力性>ではいずれの時点においてもDスコアは尺度群中最低となっている。しかしこれは分布の形から規定された artifact であって、この次元において認知が正確であることを意味するものではないと思われる。すなわち、表7から明らかのように、7段階のうち中性点への評定の割合はこの尺度群において他よりもかなり高くなっている。これは、認知の安定性のところで述べたように、この尺度群においてDK反応ないし反応の抑制が著しく多いことを示唆しているものと思われる。

(2) 個人別にみた認知の正確さ 方法のところで述べたように、Sは4名のSPを割当てられると同時に、4人の級友からパーソナリティの他者評定を受けるようにされた。ただし、分析の対象を5回の調査のすべてを受けた60名に限ったため、それぞれの数は4人より少なくなっている場合が少なくない。しかしこの60名の被験者については、いずれにしても、評定者Sとしてのデータと被評定者SPとしてのデータがあるので、それぞれについてDスコアの平均を求めた。その最大値などを示したものが表8である。ただし被験者→SP、またはS→被験者の組合せが0または1であるような被験者の結果はここには含まれていないので、Nは60より少なくなっている。

評定者の場合も被評定者の場合も、Dスコアの最大値と

中央値はT₂以降よりもT₁において大きい。評定者の場合には最小値でもT₁において最も大きくなっているが、被評定者の場合には時点による差はほとんどみられない。

レンジ(最大値と最小値の差)は、どの時点においても、評定者の場合よりも被評定者の場合においてより大きくなっている。評定者としてのDスコアが小さいことは、その被験者の共感能力が高いことを意味する。これに対して、被評定者としてのDスコアが小さいことは、その被験者のパーソナリティが他者から正確に認知されやすいことを意味するので、それはパーソナリティの可視性の高さを表わしている。したがってこの結果は、共感能力よりも可視性において個人差がより大きいことを意味している。ただし、この差は最小値ではなくて最大値の差を反映している。すなわち、とくに可視性の低い被験者が若干いることが示されている。

II ソシオメトリック評定および認知

1. ソシオメトリック評定および認知の全体的傾向

T₂以降、各被験者はクラス内の各成員に対して、7点尺度上でソシオメトリックな評定(これをp→oのように略記する)をすると同時に、他の成員が自分に対して行なった評定の認知(p←o)を行なっている。そこで、これらの全般的な動向をみるために、各成員が他の成員に与えた評定の平均値の最大値などを求めたのが表9である。また表10には各被験者が他の成員から受けた評定の平均(これはその被験者のソシオメトリックな地位のインデックスとなる)、表11には被験者が他の成員の自分に対する評定を認知したものの平均に関する統計量が示してある。クラスの大きさがこれらの値に影響すると考えられるので、これらの結果はすべてクラス別に求めた。

中央値で見ると、3測度いずれにおいても、各クラスとも、T₂では他の時点より低いが、T₃以降はあまり変化はないようである。これはパーソナリティ認知における<親近性>の尺度群の評定値と類似した傾向を示している。またレンジを見ると、受けた評定よりも与えた評定の平均値のレンジの方が大きいことがわかる。これは地位の個人差以上に評定のし方の個人差が大きいことを意

味している。評定のし方の個人差は、その被験者のクラス成員の受容度のちがいと、評定尺度の使い方のちがいの両方によって影響されると考えられる。各段階に評定すべき人数を制限しなかったことが後者の分散が生じた原因となっているのであろう。

つぎにクラスによる差異をみると、2、3の例外はあるが、3測度いずれにおいてもCクラスで中央値は最低であり、Bクラスで最高となっている。また他の成員に与えた評定値および他の成員から受けた評定値については、Cクラスでレンジも最大となっている。Cクラスはサイズが最大であり、Bクラスは最小であることから、クラスのサイズが大きいほど非好意的な評定をすることが比較的多くなること、また評定における個人差も大きくなること、そしてさらに、ソシオメトリックな地位の分化も大きくなることが示されたわけである。

表11における各クラスの各時点における中央値は、表9および表10における対応する値よりもいずれも低くなっている。これは全般に被験者は自分の受けるソシオメトリックな評定を過小評価していることを意味する。このことについては3の(1)においてもう一度ふれる。

表9 他者に与えたソシオメトリック評定の平均

	A クラス					B クラス					C クラス				
	N	最大値	最小値	中央値	レンジ	N	最大値	最小値	中央値	レンジ	N	最大値	最小値	中央値	レンジ
T ₂	30	5.97	3.41	4.45	1.56	15	6.42	4.37	5.53	2.05	46	6.02	3.64	4.53	2.38
T ₃	11	6.45	4.00	5.07	2.45	20	6.68	4.58	6.16	2.10	39	6.68	3.66	5.02	3.02
T ₄	15	6.52	4.59	5.93	1.93	17	6.53	4.42	5.79	2.11	42	6.30	3.60	5.09	2.70
T ₅	28	6.79	4.55	5.52	2.24	18	6.37	4.32	5.79	2.05	42	6.55	3.94	5.23	2.61

表10 他者から受けたソシオメトリック評定の平均

	A クラス					B クラス					C クラス				
	N	最大値	最小値	中央値	レンジ	N	最大値	最小値	中央値	レンジ	N	最大値	最小値	中央値	レンジ
T ₂	30	5.41	3.90	4.80	1.51	20	6.36	4.36	5.39	2.00	48	5.80	3.63	4.64	2.17
T ₃	30	5.82	4.55	5.30	1.27	20	6.21	5.10	5.92	1.11	48	5.61	4.13	5.12	1.48
T ₄	30	6.29	4.79	5.83	1.50	20	6.19	5.00	5.91	1.19	48	5.78	3.90	5.10	1.88
T ₅	30	6.11	4.81	5.74	1.30	20	6.00	4.88	5.59	1.12	48	5.68	3.98	5.22	1.70

表11 ソシオメトリック認知の平均

	A クラス					B クラス					C クラス				
	N	最大値	最小値	中央値	レンジ	N	最大値	最小値	中央値	レンジ	N	最大値	最小値	中央値	レンジ
T ₂	30	5.45	3.52	4.19	1.93	15	6.11	4.00	4.58	2.11	42	5.32	3.26	4.20	2.06
T ₃	17	5.76	4.35	5.07	1.41	20	6.47	4.11	6.00	2.36	40	5.89	3.75	4.59	2.14
T ₄	15	6.00	4.31	5.24	1.69	17	6.42	4.11	5.63	2.31	42	6.13	3.75	4.52	2.38
T ₅	28	6.35	4.31	5.05	2.04	18	6.16	4.05	5.16	2.11	42	6.09	3.98	4.75	2.11

最後に、積率相関係数を求めることによって、これら3測度の間の相互関係をみてみよう。与えた平均評定値と受けた平均評定値との間では $r = .460$ 、受けた平均評定値と認知の平均評定値との間では $r = .496$ 、そして与えた平均評定値と認知の平均評定値との間では $r = .804$ となり、いずれも1%水準で有意であった。このことは Tagiuri ら(1953) のいわゆる相互性、正確性、相応性の3傾向(中でもとくに相応性の傾向)が集団の水準で有意であることを意味している。このことも3において再び取り上げるであろう。

2. ソシオメトリックな地位の安定性

各被験者がクラス内の他の成員から受けたソシオメトリック評定の平均値は、クラス内でのその被験者の選択地位を表わすことは前に述べた。地位のこの測度が時点を越えてどの程度安定しているかをみるために、各クラスごとに、隣接する2時点の間でその順位相関を求めた結果が表12である。

表12 地位の安定性(順位相関)

	T ₂ ~ T ₃	T ₃ ~ T ₄	T ₄ ~ T ₅
Aクラス (N=30)	.45 **	.64 **	.73 **
Bクラス (N=20)	.57 **	.68 **	.44 *
Cクラス (N=48)	.62 **	.88 **	.82 **

* $p < .05$ ** $p < .01$

相関係数はいずれも有意であり、早い時点から地位はすでにある程度安定しているといえる。比較する時点間によるちがいをみると、AクラスおよびCクラスでは、T₂-T₃の相関が他の相関より低く、時間の経過とともに地位が安定していくことを物語っている。これに対してBクラスにおいては、相関はT₄-T₅において最低となっている。この理由はよくわからないが、T₄とT₅の間に夏休みがはさまれていたことと関係があるかもしれない。クラス間で比較をすると、どの時点間でもCクラスが最高となっており、地位の安定性はクラスのサイズと関係がありそうである。

3. 相互性・正確性・相応性

(1) 個人別にみた3測度の時点による変化 これまではクラスを単位としてソシオメトリック評定および認知の全般的な動向をみてきた。ここでは被験者pと他者oの二者関係に焦点を合わせ、ソシオメトリック評定とソシオメトリック認知の関係をみてみよう。具体的には、

Tagiuri ら(1953) の定義に従って、次の3測度を個人被験者ごとに求める。

- ① 相互性(mutuality) : pのoに対するソシオメトリック評定($p \rightarrow o$)とoのpに対するそれ($o \rightarrow p$)との一致度
- ② 正確性(accuracy) : oのpに対するソシオメトリック評定についてのpによる認知($p \leftarrow o$)とoのpに対するソシオメトリック評定($o \rightarrow p$)の一致度
- ③ 相応性(congruency) : pのoに対するソシオメトリック評定($p \rightarrow o$)とoのpに対するそれについてのpによる認知($p \leftarrow o$)の一致度

このそれぞれ2個の評定値の間の一一致度の測度を次の三つの方法によって求める。

- ① 積率相関係数
- ② Dスコア : パーソナリティ認知の正確さの場合と同じ方法による
- ③ 差得点 : 次の方法によりdを求め、 $1/N \sum d$ によって算出する
 - i) 相互性 : $d = (o \rightarrow p) - (p \rightarrow o)$
 - ii) 正確性 : $d = (p \leftarrow o) - (o \rightarrow p)$
 - iii) 相応性 : $d = (p \leftarrow o) - (p \rightarrow o)$

相互性の差得点のクラスごとの平均値は0になるが、正確性および相応性は0にならない。差得点が正であることは過大認知、負であることは過小認知を表わす。

表13は、クラス別、時点別に各測度を求めた結果を示す。Dスコアおよび差得点は、個人被験者ごとに求めて平均したものが示されている。

まず相関係数についてみると、各測度ともすべて有意であるが、中でも相応性が際立って高い。これは Tagiuri ら(1953) をはじめ、これまでの諸研究の結果と一致する。時点間の比較をしてみると、相互性と正確性はT₂~T₄において上昇しているが、T₅では再び低くなっている。T₄とT₅の間には約2か月の夏休みが含まれているが、そのことがこの結果に影響しているのであろうか。これに対して、相応性はT₂とT₃の間で大きく上昇しているが、以後はあまり変化しない。

3測度とも、Dスコアは値が小さいほど一致度が高いことを意味するが、全般的な傾向は相関係数のそれとほぼ一致している。

つぎに差得点をみると、正確性・相応性のいずれにおいても(もっとも両者の平均は欠席者がなければ同じ値になるはずである)、全クラスおよび全時点で負となっている。すなわち全体として過小認知の強い傾向が認められる。これは表11を表10および表9と比較して先に論じたところと同じ事実を反映している。しかし、これは、おそらく認知そのものではなくて、認知した結果を反応

表 13 時点ごとの相互性, 正確性, 相応性

		T ₂				T ₃				T ₄				T ₅			
		N	相関	D コ ス ア	差得点	N	相関	D コ ス ア	差得点	N	相関	D コ ス ア	差得点	N	相関	D コ ス ア	差得点
相互性	A	870	.32	1.53	0	110	.49	1.35	0	210	.53	1.15	0	756	.31	1.27	0
	B	210	.43	1.47	0	380	.34	1.15	0	272	.40	1.06	0	289	.42	1.22	0
	C	1845	.31	1.54	0	1482	.32	1.44	0	1722	.39	1.25	0	1722	.38	1.31	0
	全体	2925	.34	1.53	0	1972	.37	1.38	0	2204	.44	1.22	0	2767	.36	1.29	0
正確性	A	870	.39	1.42	-0.38	110	.51	1.20	-0.15	210	.55	1.18	-0.44	756	.30	1.33	-0.47
	B	210	.48	1.47	-0.67	380	.30	1.25	-0.32	272	.48	1.04	-0.35	289	.47	1.20	-0.30
	C	1845	.32	1.40	-0.35	1482	.33	1.40	-0.40	1722	.38	1.25	-0.39	1722	.35	1.28	-0.42
	全体	2925	.37	1.41	-0.38	1972	.38	1.36	-0.37	2204	.44	1.22	-0.39	2767	.37	1.28	-0.42
相応性	A	870	.70	1.04	-0.38	110	.78	0.84	-0.15	210	.71	0.98	-0.44	756	.76	0.87	-0.47
	B	210	.74	1.15	-0.67	380	.73	0.82	-0.32	272	.73	0.79	-0.35	289	.65	0.98	-0.30
	C	1845	.63	1.09	-0.35	1482	.71	0.98	-0.40	1722	.74	0.86	-0.39	1722	.75	0.87	-0.42
	全体	2925	.67	1.08	-0.38	1972	.73	0.94	-0.37	2204	.75	0.87	-0.39	2767	.75	0.88	-0.42

に表わす時の歪曲によるのであろう。ただし、この過小認知の傾向にはクラスと時点の間の交互作用効果がみられる。すなわち、AクラスではT₂・T₃よりもT₄・T₅で過小認知の傾向が強いが、Bクラスではこの傾向はT₂において最も強い。またCクラスではT₂からT₅にかけてこの傾向が強くなるようにみえるが、その変化はあまり大きくない。このように、全体としては、時点によって過小認知の傾向の強さが一定の傾向を示すことはない。

表 14 両評定値が一致したケースの割合(%)

			1 - 1	2 - 2	3 - 3	4 - 4	5 - 5	6 - 6	7 - 7	全 体
相互性	T ₂	実測値	0.00	0.19	1.52	10.16	5.97	5.97	4.00	27.81
		期待値	0.01	0.20	1.03	9.46	5.47	4.55	0.84	21.56
	T ₃	実測値	0.00	0.00	0.51	8.82	6.80	11.46	8.62	36.21
		期待値	0.00	0.02	0.25	5.32	5.14	9.63	2.72	23.08
	T ₄	実測値	0.00	0.00	0.00	7.89	6.81	11.07	8.89	34.66
		期待値	0.00	0.01	0.06	5.48	7.17	9.69	2.20	24.61
	T ₅	実測値	0.00	0.00	0.07	6.82	8.76	13.00	9.70	38.35
		期待値	0.00	0.01	0.07	4.10	6.78	10.22	3.29	24.47
正確性	T ₂	実測値	0.00	0.27	1.88	17.00	6.46	3.13	2.02	30.76
		期待値	0.01	0.14	1.11	14.59	5.65	2.06	0.31	23.87
	T ₃	実測値	0.00	0.00	0.29	12.08	6.02	9.15	5.49	33.03
		期待値	0.00	0.01	0.18	8.92	5.32	7.95	1.20	23.58
	T ₄	実測値	0.00	0.05	0.05	12.84	7.76	8.26	5.94	34.90
		期待値	0.00	0.01	0.05	9.42	7.63	6.43	1.13	24.67
	T ₅	実測値	0.00	0.00	0.07	9.52	9.48	8.29	5.21	32.57
		期待値	0.00	0.00	0.06	7.04	8.36	7.36	1.36	24.18
相応性	T ₂	実測値	0.16	1.23	4.02	22.32	7.40	3.86	2.79	41.78
		期待値	0.01	0.14	1.07	14.93	5.45	2.04	0.32	23.96
	T ₃	実測値	0.08	0.28	1.58	19.79	10.55	13.39	6.36	52.03
		期待値	0.00	0.01	0.18	9.57	5.70	7.04	1.11	23.61
	T ₄	実測値	0.07	0.26	0.73	20.39	10.72	12.45	7.39	52.01
		期待値	0.00	0.01	0.05	9.73	7.63	6.00	1.18	24.60
	T ₅	実測値	0.06	0.23	1.13	19.72	13.54	12.54	6.88	54.10
		期待値	0.00	0.00	0.05	8.23	8.11	6.85	1.25	24.49

上にみたように、相互性、正確性、および相応性の相関係数はどの時点をとっても有意であった。これは、それぞれにおいて、二つの評定値そのものが一致することがかなり多いことを示唆する。そこで、どの段階での評定で一致が生じているかをみるために表14をつくった。これは、測度別、時点別に、2個の評定値がそれぞれの段階で一致している比率を求めたものである。比較のために、2種の評定値の分布から偶然によって期待される一致率もあわせて記してある。

一致率の全段階での実測値は、4時点を平均すると、相応性でもっとも高く49.98%、ついで相互性の34.26%、正確性の32.82%となっている。一方期待値の平均はそれぞれ23.43%、24.68%、および24.17%となっており、この方は3測度の間でほとんど差がない。このことから、表13でみられた相応性における相関の高さは、分布の違いなどによる artifact ではなく、やはり本質的なものであることがわかる。

つぎに評定の段階別に一致率をみてみよう。まず気づくことは、相互性とちがって、正確性および相応性における実測値が4の段階で高いことである。因みに、4時点のデータを平均して、全段階での実測値のうち4の段階のそれが占める比率は、相互性で約25%であるのに対して、正確性では39%、相応性では41%となった。しかしこの比率を期待値について求めてみると、よく類似した値が得られた。すなわち、相互性では25%、正確性では41%、そして相応性では43%であった。したがって、中性点においてとくに認知が正確であるとか、そこにおいてとくに相応性の傾向が強いのというわけではないといえる。それは分布の偏りからもたらされる artifact であろう。

先に、表13の差得点の平均値が負であることから、正確性および相応性において過小認知の傾向が強いと述べたが、このことを別の角度から確かめてみよう。表14の実測値の全体の欄は、時点ごとに、 $p \rightarrow o$ が $o \rightarrow p$ (正確性の場合)あるいは $p \rightarrow o$ (相応性の場合)と一致した比率を示している。これ以外は過大な認知と過小な認知に分けられるわけであるが、この三つの場合の全ケースの中で占める割合が表15に示されている。これによると、正確性では、どの時点をとっても過小認知が最も多くなっている。相応性では一致した認知の比率が最も高いが、つぎに高いのは過小認知であり、過大な認知の占める比率は低い。

(2) ソシオメトリック地位との関係 これまで、全体として相互性、正確性および相応性という強い傾向があることをみてきたが、ここでこれらの傾向の個人差についてみてみよう。被験者ごとに4時点のデータを合計し

表15 ソシオメトリック認知の偏りの方向

		(%)			
		T ₂	T ₃	T ₄	T ₅
正確性	正確な認知	30.76	33.03	34.89	32.57
	過大な認知	23.43	22.00	18.92	19.93
	過小な認知	45.81	44.97	46.19	47.50
相応性	正確な認知	41.79	52.01	52.01	54.10
	過大な認知	15.09	9.76	7.76	5.59
	過小な認知	43.12	38.23	40.23	40.31

てこの3測度を示す相関係数を求めた。表16には、クラス別に、その最大値、最小値、中央値およびレンジが示してある。相関係数が負となった被験者はいないが、レンジはかなり大きいことがわかる。相関係数は相応性においてももっとも高いが、レンジの大きさには3測度間で差がないようである。クラスによる差異では、個人差はAクラスでもっとも大きく、Bクラスでもっとも小さい傾向がうかがわれるが、クラスのサイズによる一定の傾向はない。

表16 個人別の相互性、正確性、相応性

クラス	N	最大値	最小値	中央値	レンジ	
相互性	A	30	0.70	0.14	0.48	0.56
	B	20	0.66	0.24	0.48	0.42
	C	47	0.61	0.13	0.41	0.48
正確性	A	30	0.74	0.07	0.53	0.67
	B	20	0.68	0.19	0.50	0.49
	C	47	0.67	0.18	0.42	0.49
相応性	A	30	0.91	0.35	0.78	0.56
	B	20	0.92	0.42	0.73	0.50
	C	47	0.88	0.30	0.71	0.58

このような個人差が何に由来するかを探るため、3測度と被験者のソシオメトリック地位との関連性をみることにした。被験者ごとに算出した3測度のDスコアおよび差得点と、その被験者の受けたソシオメトリック評定の平均値との間の積率相関係数を求めた結果が表17である。

表17 ソシオメトリック地位と相互性、正確性、相応性との関連性

N = 60			
	相互性	正確性	相応性
Dスコア	-.45**	-.24 [△]	-.11
差得点	-.22 [△]	-.28*	-.08

** $p < .01$ * $p < .05$ [△] $p < .10$

まず相互性のDスコアと負の有意な相関が得られた。これは地位の高い者ほど相互性の傾向が強いことを意味する。このような結果は、もしもソシオメトリック評定で各段階に評定すべき人数を制限していれば、決して起り得ないことであろう。その場合には、地位が高い者および低い者は、与える評定と受ける評定の平均が異なるために、中位の者よりDスコアが大きくなりがちであるからである。しかし、方法のところでも述べたように、われわれは評定数を制限はしなかった。したがってこの結果は、地位の高い者は、低い者に比べて、より他者を受容する傾向が強いと起因すると思われる。事実、地位と他者に与える評定の平均値の間には .460 という高い相関があることがわかった。このことは、地位と相互性の差得点の間の相関が、有意ではないが、やはり負となっていることにも影響を与えているものと思われる。

つぎに正確性ではDスコアとの間に有意ではないが負の相関がある。つまり、地位の高い者ほど相手からの評定を正確に認知する傾向がある。正確性の差得点との負相関は有意である。これは、地位が高いほど相手からの評定を控え目に認知することを意味する。にもかかわらず地位の高い者の認知が正確な傾向にあるのは、地位と被評定の認知の間に .496 という正の高い相関があることに支えられているものと考えられる。

最後に、地位と相応性の傾向の間には相関はみられない。地位いかんとは無関係に、相応性の傾向は一般に極めて強いのである。

Ⅲ パーソナリティ認知とソシオメトリックな評定および認知との関連性

1. ソシオメトリック評定との関連性

ここで本研究の主要な目標の一つである、ソシオメトリック評定とパーソナリティ認知の関連性について、得られたデータを分析してみよう。ただ、ソシオメトリック評定は、各段階に評定すべき人数を制限しなかったもので、被験者によってその分布には大きな差があった。そこで評定値を個人ごとにz得点に変換したものをを用いる。

まず、この規準化されたソシオメトリック評定値とパーソナリティの各尺度の評定値との相関係数を各時点ごとに求めたのが表18である。

全体的にみると、「すきな-きらいな」においてもっとも高い相関が得られた。この尺度はパーソナリティの特性というよりも好意度を表わしていると考えられるので、この結果はむしろ当然と言うべきであるかもしれない。そのほか、〈親近性〉を表わす「感じのよい-感じのわるい」および「暖い-冷い」で .25 以上の相関が得られたが、これも同様に理解される。それにしても、ど

表 18 ソシオメトリック評定とパーソナリティ評定の間の相関

	T ₂	T ₃	T ₄	T ₅	Σ
楽観的な	.25	.13	.17	-.02	.17
静かな	-.09	-.03	.03	.03	-.05
すなおな	.26	.25	.18	.09	.20
親切な	.14	.15	.13	.14	.15
まじめな	.05	.03	.02	.05	.03
無口な	-.15	-.09	-.07	.07	-.09
こまやかな	.06	.09	.05	.02	.06
明るい	.36	.20	.10	.11	.24
魅力のある	.34	.21	.13	.14	.23
健康的な	.23	.06	-.08	-.02	.07
活発な	.23	.10	-.07	-.09	.09
外向的な	.16	.04	-.07	-.08	.05
かわいい	.37	.18	.10	.06	.20
感じのよい	.52	.26	.30	.23	.34
すきな	.54	.41	.36	.31	.42
清潔な	.15	.11	.05	-.02	.08
ユーモアのある	.21	.21	.13	.10	.18
人のよい	.25	.21	.20	.11	.20
ほがらかな	.36	.18	.07	.10	.21
美しい	.29	.08	.06	.01	.13
社交的な	.17	.08	.03	-.03	.09
地味な	.04	.05	.01	.23	.09
暖い	.32	.28	.21	.15	.26
積極的な	.15	-.02	.04	-.06	.06
たよりない	-.31	-.13	-.06	-.01	-.14

注) ゴチック体の数値は .25 以上の相関係数を示す。

の欄で .25 以上の相関が得られたのはこの 3 尺度のみであるのは意外であった。

時点別にみると、時間の経過とともに相関係数は次第に低くなっていくようである。 .25 以上のものをみると、T₂においては12尺度あったのが、T₃では4尺度、T₄では2尺度、そしてT₅では1尺度のみとなっている。先に、ソシオメトリックの評定はT₃以降ではよりポジティブな方向に変化することを述べたが、これとは別に、パーソナリティ評定とは次第に相関しなくなることは注目値する。

尺度別にみると、T₂においては、〈魅力性〉の次元に属する 3 尺度はすべて .25 以上の相関を示している。また〈親近性〉の次元に属する 6 尺度のうち、「親切な-不親切な」を除く他の 5 尺度において高い相関が見いだされている。このほかに「明るい-暗い」、「ほがら

かな-いんうつな」および「楽観的な-悲観的な」の3尺度との相関が高いが、これらは<活動性>の尺度群に属してはいるが、<明朗性>を示す尺度であり、T₃およびT₄での因子分析の結果では<親近性>と融合を示していたものである(表2参照)。このように、パーソナリティの尺度の中でも<親近性>、<明朗性>、および<魅力性>と関連したものがソシオメトリック評定と高い相関を示すということは、十分うなづける結果であるといえよう。

このように、ソシオメトリック評定はパーソナリティ尺度の特定の因子と結びついていることが示唆されたので、このことをさらに確かめるために、個人ごとに算出されたソシオメトリック評定のz得点を基準変量、パーソナリティ評定による因子得点を予測変量として、重回帰分析を行なった。その結果得られた重相関係数および各予測変量の標準重みベクトルは表19に示す通りとなった。

表19 重回帰分析における標準重みベクトル

因子得点 時点	活動性	親近性	魅力性	誠実性	重相 関係数
T ₂	.17	.38	.30	.11	.53
T ₃	.03	.31	.14	-.08	.34
T ₄	-.01	.26	.06	-.05	.28
T ₅	-.07	.26	.02	-.09	.27
Σ	.07	.30	.13	-.05	.35

4回の調査のデータをコミにした場合の重相関係数は.35で高くはない。これは表18の結果からも予期される場所である。そして、それは時点を追うごとにさらに低くなっていくことがわかる。因子別ではやはり<親近性>がもっとも高い重みベクトルを有しており、ついで<魅力性>である。<誠実性>のそれは、T₂を除いてすべて負となっている。

2. 好意度と仮定された類似性

Fiedlerら(1952)は、人は好きな他者と自分の間のパーソナリティの類似性を、嫌いな他者と自分の間のそれよりも大きいと仮定する傾向があることを示した。われわれのデータでもこのような傾向がみられるかどうかを調べるために、主たる分析の対象とした60名の被験者の各4名のSPに対するパーソナリティ評定と、パーソナリティの自己評定の間のDスコアを求め、それと各SPに対するソシオメトリック評定の間の積率相関係数を算出した(N=60×4=240)。得られた相関係数の値は、T₂で-.129、T₃で-.199、T₄で-.102、T₅で

-.174であった。これらはいずれもp<.05で有意である。したがってFiedlerら(1952)の結果がreplicateされた。ただし相関は高くないので、いわゆるAssumed Similarityの傾向は強いとはいえない。また時点による一定の傾向もみられない。

IV パーソナリティの自己評定

知覚全般に当てはまることではあるが、社会的知覚の場合には知覚者の内部的要因がことに重要な規定因であると考えられている。われわれの被験者の場合、入手できる内部的要因としては、パーソナリティの他者評定のために用いられたのと同じ25尺度上での自己評定のデータがある。そこで、自己評定と他者評定の関連性について検討することにする。ただし、その前に、自己評定の因子構造をみておくことにする。

1. パーソナリティの自己評定の因子構造

各被験者はT₁において、他者評定と同じ尺度を用いて自己評定をさせられた。そのデータを主因子法により因子分析をした。固有値1以上という基準で7因子が抽出された。それをバリマックス回転したが、第IV因子以下は解釈困難であった。そこで改めて3因子を抽出し、バリマックス回転した。因子負荷行列は表20に示す通りである。ここでも、表2と同じく、単純構造を看取するのに容易なように、尺度の順を入れ換えてある。

第I因子は「おしゃべりな」、「うるさい」、「外向的な」、「ユーモアのある」などで代表されており、これは<活動性>の因子と解釈されよう。表2の他者評定の場合の第I因子とは負荷量の大ききの順位がやや異なるが、.50以上の負荷を示す尺度はほとんど一致していることがわかる。表2の12尺度のうちここに含まれないのは「病的な-健康な」のみであり、逆にここにあって表2に含まれていないのは「ふまじめな-まじめな」のみである。この最後の尺度の負荷量は負であり、やや異質といえよう。

第II因子では、「にくらしい-かわいい」、「魅力のない-魅力のある」、「みにくい-美しい」の尺度で負荷量が高いので魅力性に関係する因子と思われるが、同時に「ひねくれた-すなおな」、「不潔な-清潔な」、「ふまじめな-まじめな」の尺度の負荷量も高いので、一応<道徳的魅力性>の因子としておく。第III因子の解釈はやや困難であるが、「ぎつな-こまやかな」、「派手な-地味な」、「しっかりした-たよりない」、「冷たい-暖かい」などで負荷量が高く、また「悲観的-楽観的」および「内向的-外向的」で高くはないが負の負荷量があるので、<おとなしさ>の因子と解釈することができ

そうである。

表 20 パーソナリティの自己評定の因子構造

	第Ⅰ因子 活動性	第Ⅱ因子 道徳的 魅力性	第Ⅲ因子 おとな しさ
無口な-おしゃべりな	.92	-.01	.00
静かな-うるさい	.87	-.29	-.06
内向的な-外向的な	.82	.14	-.36
ユーモアのない-ユーモアのある	.79	.30	.00
不活発な-活発な	.76	.19	-.13
暗い-明るい	.75	.23	-.35
いんうつな-ほがらかな	.74	.32	-.25
悲観的な-楽観的な	.65	-.02	-.36
消極的な-積極的な	.60	.12	-.01
非社交的な-社交的な	.59	.23	-.03
ふまじめな-まじめな	-.53	.44	.03
地味な-派手な	.42	.07	-.69
にくらしい-かわいい	-.05	.65	.20
魅力のない-魅力のある	-.07	.59	.08
ひねくれた-すなおな	.17	.51	-.17
みにくい-美しい	.02	.50	.15
不潔な-清潔な	.14	.47	.02
人のわるい-人のよい	.23	.46	.08
きらいな-すきな	.04	.45	.01
ぎつな-こまやかな	-.13	.12	.73
たよりない-しっかりした	.21	.40	-.47
冷たい-暖かい	.20	.23	.44
不親切な-親切な	-.13	.15	.39
感じのわるい-感じのよい	.27	.35	.11
病的な-健康な	.27	.25	-.16
説明される分散(%)	62.2	25.0	12.7

注) ゴチック体の数値は .40 以上の負荷量を示す。

2. 自己評価と対人認知との関係

自己評価の高低と対人認知の諸側面との関連性を検討することは意義があるであろう。ここでは、自己評価の測度として、自己評定のデータから次の二つを求めることにする。第一は「きらいな-すきな」の尺度での自己評定値である。これは自己に対する全般的な好意度を直接的に測っているものといえる。第二は、上述の因子分析によって抽出された<道徳的魅力性>の因子得点である。「きらいな-すきな」の尺度はこの因子での負荷量がかなり高いし、高い負荷量をもつ他の尺度の内容をみても、この因子は自己評価と深くかかわっているとみることができる。因みに、この二つの測度の間には .481

($P < .01$) という相関がある。

他方、対人認知の側面としては次のものを取り上げることにする。

① ソシオメトリック地位(他者から与えられるソシオメトリック評定の平均)——他者からよく受容されていれば自己評価が高くなると考えられる。同時に、自己評価の高い者は社会的適応がよく、その故に他者からより受容されるかもしれない。この因果関係の方向はともかくとして、自己評価とソシオメトリック地位の間にはポジティブな相関が期待される。

② 共感能力——自己評価の高い者は他者との社会的相互作用を積極的に行なうとすれば、他者のパーソナリティをよりよく理解する機会をもつであろう。故に、ポジティブな相関が期待される。この測度としてはDスコアを用いる。

③ 可視性——積極的に相互作用する者は、他者をよりよく理解する機会をもつとともに、他者からよりよく理解される機会をもつ。故にポジティブな相関が期待される。同じくDスコアによる。

④ 相互性・正確性・相応性——地位とこれらの測度の間には負の相関が見いだされた(表17参照)。したがって自己評価とも同様な傾向が期待される。いずれもDスコアと差得点を用いる。

自己評価の二つの測度と対人認知のこれらの諸測度間の積率相関係数を算出した結果が表21に示してある。これによると、自己評価の両測度は共感能力のDスコアと正の有意な相関がある。Dスコアは低いほど共感能力があるわけであるから、これは期待と逆の結果である。

つぎに相応性のDスコアとの間に有意な負の相関があった。これは自己評価の高い人ほど相応性の傾向が強いことを意味している。この意味は二通りの解釈が可能である。第一は、自己評価の高い人は、自分が好意を持つ人は自分に対しても好意を持ち、自分が好意的でない人は自分に対しても非好意的であると認知している、というものである。すなわち、自己評価の高い人は自分の相手に対するソシオメトリックな評定が相手によって返報されているとみる傾向がある、というのである。第二の解釈は、自己評価の高い人は、認知された相手の自分に対する好意-非好意をソシオメトリック評定において返報する傾向が強い、というものである。本研究の相関的性質から、いずれの解釈が正しいか断定する資料はないが、後者の方がより plausible であるように思われる。これは自己評定と相応性の差得点の相関が、有意ではないが正であることとも関連している。全般的に本研究の被験者は過小認知の傾向があることが示された(表15)が、自己評価の高い人はその傾向がより弱いのである。

表 21 自己評価と対人認知との関連性 (相関)

自己評価	ソシオメトリック地位	共感能力	可視性	相互性		正確性		相応性	
				Dスコア	差得点	Dスコア	差得点	Dスコア	差得点
「きらい-すき」7点評定	.13	.31*	-.07	-.21	-.07	-.14	.10	-.33**	.20
<道徳的魅力性>因子得点	.14	.42**	-.01	-.18	-.18	-.23△	-.04	-.36**	.22△

** p<.01, * p<.05, △ p<.10

自己評価と地位との間には、期待されたように、正の相関があることがわかったが、その値は有意ではなかった。

討 論

1. パーソナリティ認知の因子構造

他者のパーソナリティ認知に関して、本研究ではすべての時点を通じて一貫して安定した因子構造が見いだされた。これは非常に重要な事実である。われわれの第1回の調査は入学後約4週間経過した時点においてなされた。したがって、その時点ではSはSPについてある程度の情報を得ていたにちがいない。もしもさらに早い時期にパーソナリティの他者評定を行なったとしたら、これといくらちがった因子構造が得られたかもしれない。そのことを確かめるのは今後の課題であるが、仮りにSとSPの間にはほとんど相互作用がない段階において調査したとしても、因子構造にはあまり差異がないのではないかと、というのがわれわれの予想である。この予想は二つの根拠に基いている。

第一は、われわれの用いた尺度とほとんど同じものを用いて行なわれた飯島(1961)の結果との類似性が著しい点である。方法のところでも述べたように、われわれは彼女の作成した尺度の30項目のうち因子負荷のバタンのはっきりしない5項目を除いて、25項目を借用した。彼女の被験者は男女の大学生で、この尺度を用いて完全に未知な同性の相手を評定している。それを因子分析したところ、<社会的活動性>、<魅力性>、<道徳性>と命名された3因子が得られた。これを本研究の結果と比較したものが表22である。

これをみると、<活動性>の因子は両者でほとんど完全に一致し、しかも共に第1因子として抽出されていることがわかる。また、本研究で<魅力性>の次元に属する3尺度は飯島の研究でも<魅力性>に属しており、これも一致する。ただ本研究で<親近性>の次元に含まれる5尺度は、飯島では<道徳性>と<魅力性>に分かれる。また本研究の<誠実性>の尺度も<魅力性>と<道徳性>に分かれている。このことから、本研究での<魅力性>の次元の内容は飯島のそれに比してやや狭いといえる。すなわち、そこには「魅力のある」、「美しい」

表 22 三つの因子構造の比較

尺 度	本 研 究 (他者評定)	飯 島 (1961)	本 研 究 (自己評定)
内 向 的 な-外 向 的 な	活 動 性	社会的活動性	活 動 性
非 社 交 的 な-社 交 的 な	活 動 性	社会的活動性	活 動 性
不 活 発 な-活 発 な	活 動 性	社会的活動性	活 動 性
無 口 な-おしおべりな	活 動 性	社会的活動性	活 動 性
消 極 的 な-積 極 的 な	活 動 性	社会的活動性	活 動 性
静 か な-う る さ い	活 動 性	社会的活動性	活 動 性
暗 い-明 る い	活 動 性	社会的活動性	活 動 性
い ん う つ な-は ち ゃ ん な	活 動 性	社会的活動性	活 動 性
ユ ー モ ア の な い-ユ ー モ ア の あ る	活 動 性	社会的活動性	活 動 性
地 味 な-派 手 な	活 動 性	社会的活動性	活 動 性・おとなしき
悲 観 的 な-楽 観 的 な	活 動 性	社会的活動性	活 動 性
病 的 な-健 康 な	活 動 性	活動性・道徳性	活 動 性
冷 い-暖 い	親 近 性	道 徳 性	おとなしき
人 の わ る い-人 の よ い	親 近 性	道 徳 性	道 徳 性
感 じ の わ る い-感 じ の よ い	親 近 性	魅力性・道徳性	道 徳 性
き ら い な-す き な	親 近 性	魅力性	道 徳 性
不 親 切 な-親 切 な	親 近 性	道 徳 性	道 徳 性
ひ ね ぐ れ た い-す な お な	親 近 性	道 徳 性	道 徳 性
魅 力 の な い-魅 力 の あ る	魅 力 性	魅 力 性	道 徳 性
に ぐ ら し い-か わ い い	魅 力 性	魅 力 性	道 徳 性
み に く い-美 し い	魅 力 性	魅 力 性	道 徳 性
ふ ま じ め な-ま じ め な	誠 実 性	道徳性・魅力性	活動性・道徳性
た よ り な い-し っ か り し た	誠 実 性	魅 力 性	道徳性・おとなしき
ざ つ な-こ ま や か な	魅 力 性	魅 力 性	おとなしき
不 潔 な-清 潔 な	魅 力 性	魅力性、道徳性	道 徳 性

および「かわいい」という魅力を直接的に規定ないし構成する項目だけが含まれているのに対し、飯島では、「すきな」および「感じのよい」という好意を表わす項目と、「しっかりした」あるいは「こまやかな」という性格特性を含んでいる。また本研究では、「すきな」あるいは「感じのよい」という一般的な好意を表わす項目が「暖い」、「親切な」、「人のよい」などの暖かさを示す項目と結びついているのに対し、飯島では、「美しい」、「魅力のある」などの魅力性の次元に含まれている、と言える。

このように若干の差異があるが、大筋においては両研究の結果はほとんど一致しているとみることができる。この差異が生じた原因は、われわれの研究においては飯島の用いたもののうち5尺度を省いた、という点に帰属することができよう。

われわれの予想の二番目の根拠は、パーソナリティ評定が評定者の暗黙裡のパーソナリティ理論に大きく左右されることを示した最近の知見である。たとえば、Mulaik(1964)は20のカテゴリーの中から76項目からなるパーソナリティの両極尺度を構成して大学生に与えた。第1群は、これを用いて20人

の実在する人物(10人は有名人,10名は家族)を、第2群は20のステレオタイプ(空軍の将軍,精神病患者,田舎の家庭の主婦,など)を評定した。また第3群は、上記の20のカテゴリーから選ばれた20の特性語を評定した。因子分析の結果,それぞれ11, 10, および9個の因子が抽出されたが,評定対象の非常な違いにもかかわらず,約半数の因子は共通していることがわかった。また最近 Shweder (1975)はさらにショッキングな結果を報告している。彼は, Newcomb (1929) がキャンプにおける少年たちの行動観察において用いたカテゴリー, M M P I からの数項目, などの概念的類似性の評定結果を因子分析して得られた因子構造は, そのカテゴリーを用いての行動観察の結果やその項目を用いて何人かに実施したデータから得られた因子構造と, ほとんど一致することを示した。

したがって, われわれの被験者も飯島の被験者も, 実在する S P を評定するさいに, どの特性とどの特性がクラスターを構成しているか, についての暗黙のうちの信念によって大きく影響されていたと推定される。

つぎに, 表22によって, パーソナリティの自己評定の因子構造を考察してみよう。まず<活動性>の因子は他者評定(および飯島)の場合とほとんど一致している。ただし, 他のケースとちがって, 「ふまじめな」という項目がこの次元に含まれている。おそらくこれは, 自己評定の場合には, コツコツと努力するタイプではない, という意味にこれがとられているのであろう。また, 自己評定における<魅力性>の次元は他者評定におけるそれよりも広い内容をもっている。「魅力のある」, 「かわいい」, 「美しい」などは, 自己評定においては, 見かけの上の魅力というだけでなく, 「すなお」で「人がよく」, 「清潔な」などの特性をもつが故の魅力, というように考えられているのであろうか。

2. <活動性>についての認知

われわれの研究における他者評定および自己評定, それに他の研究においても, <活動性>はパーソナリティ認知の因子構造の中で重要な位置を占めている。また, われわれの研究における他者評定では, この次元での認知は早い時点から分化し安定していることが示された。また評定の確信度も高い。この理由としては, 活動性は外示的な行動に直接的に反映されやすく, そのため他の次元よりいっそう可視的であることが考えられる。もしそうだとすれば, これに属する尺度では, 他の尺度にくらべて, 認知の正確さが高くなるはずである。しかし, S の自己評定との D スコアを比較したところ, この予想は支持されなかった。つぎに, <活動性>が外示的行動

に反映されやすいとすれば, 活動的な人は非活動的な人よりも, そのパーソナリティを他者からより正しく認知されるものと考えられる。そこで, 自己評定における<活動性>および<おとなしさ>の因子得点を被験者ごとに求め, それとその人の S P としてのパーソナリティの可視性(Dスコア)の相関を求めた。得られた相関係数は<活動性>との間で .138 (n.s.), <おとなしさ>との間で .379 ($P < .01$) であった。

しかし<活動性>という印象は S P の外示的行動のみから得られるのではあるまい。他の次元にもまして, それは S P の相貌的特徴や服装によっても規定されることが考えられる。ほとんど相互作用のない相手に対する印象を扱った飯島の場合にもそれは現われているし, 顔写真を用いたわれわれの研究(林ほか, 1977)においてもまたこの因子が抽出されているからである。

3. ソシオメトリック評定および認知

被験者と他の各成員の間の dyadic な関係において, 相互性, 正確性, および相応性という三つの一致傾向がみられ, 中でも相応性の傾向が強かった。これは Tagiuri (1953) をはじめ, 多くの研究の知見と一致する。また, 個々の dyadic な関係ではなく, 被験者の行なった3種類の評定の全般的動向をみても, 同様な傾向があった。すなわち, 各被験者が他の全成員に与えるソシオメトリック評定の平均値, 受けた評定の平均値, 認知の評定平均値の間には有意な相互相関が見いだされた。ことに, 与えた評定の平均値と認知の平均評定値の相関は .804 と, 非常に高いものであった。これは相応性の傾向に由来するものであろう。また与えた評定の平均と受けた評定の平均(地位)の相関もかなり高かった。これは相互性の傾向によるものであろう。しかし, 別の観点からすれば, ソシオメトリックな地位の高い者は, 低い者よりも, Jennings(1951)のいわゆる情緒的拡がり (emotional expansiveness) が大きいことを意味しているとも考えられる。最後に, 与えた評定の平均と認知の平均評定値の間の相関は, 一つには正確性の傾向を表わしているものとみられる。しかしいま一つの解釈は, 地位の高い者は一般に自己評価が高いので, 他者から好意的評定を受けているという自信を持ちやすい, というものである。われわれの被験者は, そして青年は一般に, 他者から受けている好意を過小にみる傾向があるようである。これは, 前述したように, 認知そのものの歪曲というよりは, 評定のさいの反応の歪曲によるものと思われる。それはともかくとして, 地位が高い者は自己が受けている好意を控え目に見積るという傾向はより弱いと考えられる。ただし, 表21に示されているように, 「す

きな-きらいな」という尺度での自己評定、および〈道徳的魅力性〉の因子得点、という自己評価の2測度はソシオメトリックな地位と有意に相関してはいないので、この解釈を裏づけるようなデータは得られていない。

4. パーソナリティ評定とソシオメトリック評定

表19に示されたように、SのSPに対するソシオメトリック評定の分散を規定するSPの認知されたパーソナリティ特性としては、〈親近性〉の次元がもっとも大きな重みを占めていた。このこと自体は十分納得できる結果である。しかし、重相関係数は以外に低かった。もっとも高かった T_2 においてさえ、認知されたパーソナリティはソシオメトリック評定の分散のうち約27%しか説明しなかった。表18に示された相関係数も、当然のことながら、全般に高くはなかった。しかも両者の関連性は時間の経過とともに次第に低下するのがみられた。この理由として考えられるのは、パーソナリティ認知に用いた尺度の内容が interpersonal attraction の規定因として重要なものをあまり多く含んでいなかった、ということである。たとえば、能力的な因子が含まれていればそれはもっと大きなウエイトをもったかもしれない。さらにまた、大学生ともなると、対人魅力を規定するのはたんにSPの認知されたパーソナリティの社会的望ましさではなくて、Sのパーソナリティとの compatibility が重要な役割を果たすかもしれない。

5. 自己評価と対人認知

Heider (1946, 1958) は、人pの他の人oに対する態度、pの第三の人qに対する態度、およびoのqに対する態度のpによる認知、という3個の関係の間の関係についてバランス・モデルを提出した。Wiest (1965) は、これを拡張して、qの代りにpの自己sを置いてもよいと考え、中学生を被験者にして実験している。その結果、pの自尊心が高い(すなわち、 $p \rightarrow s$ がポジティブな)ときには相応性($p \rightarrow o$ と $p \leftarrow o$ の一致)が成立するが、低いときには成立しないことがわかった。換言すれば、自尊心と相応性の間には正の相関が見いだされたのである。

これと同じ結果が本研究においても得られている。すなわち、自己評価の2測度と相応性のDスコアの間には有意な負の相関がみられた(表21)。また、自己評価の測度は相応性の差得点と、有意ではないが、正の相関があった。すなわち、自己評価の低い人は、全般的にみられる相応性における過小視($p \leftarrow o$ が $p \rightarrow o$ より低いこと)がより強いことが示されたのである。ただし、自己評価の測度と他者に与えたソシオメトリック評定の平均値、

および認知の平均評定との間の相関は、いずれも有意ではなかった。したがって、自己評価の低い人は過小認知の傾向が強いといっても、それは $p \rightarrow o$ が高い、または $p \leftarrow o$ が低い、ということではなくて、 $p \rightarrow o$ と $p \leftarrow o$ の相対的高さについて言われるのだと理解される。

パーソナリティの自己評定における〈おとなしさ〉の因子得点と、他者から受けるとした評定の認知の高さの間には、有意な負の相関が得られた。この因子得点の低い人とは、「こまやか」で、「地味」で、「暖く」、かつ「非活動的な」人といえるので、このような人ほど他者から自分に与えられる好意を控え目に認知する傾向があることは、十分に理解されよう。これに対して、〈活動性〉の因子得点はソシオメトリック評定および認知との間に有意な関連を示さなかった。

最後に、自己評価の高い人ほどパーソナリティ認知における共感能力が低い、という結果が得られた。これは予想とは逆の結果であるが、その理由は現在のところよくわからない。ただ一つ考えられるのは、自己評価の高い人はそのようなことに無頓着でいられるだけの余裕があるのかもしれない、ということである。

文 献

- Anderson, N. H. 1962 Application of an additive model to impression formation. *Science*, 138, 817-818.
- Anderson, N. H. 1974 Cognitive algebra. In L. Berkowitz (ed.) *Advances in experimental social psychology*, 8, New York: Academic press.
- Aronson, E., & Linder, D. 1965 Gain and loss of esteem as determinants of interpersonal attractiveness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1, 156-171.
- Asch, S. E. 1946 Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.
- Byrne, D. 1971 *The attraction paradigm*. New York: Academic press.
- Fiedler, F. E., Warrington, W. G., & Blaisdell, F. J. 1952 Unconscious attitudes as correlates of sociometric choice in social group, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 790-796.
- Hastorf, A. H., Kite, W. R., Gross, A. E., & Wolfe, L. J. 1965 The perception and evaluation of

- behavior change. *Sociometry*, **48**, 400-410.
- 林 文俊 1978 相貌と性格の仮定された関連性(3)
— 漫画の登場人物を刺激材料として —. 名古屋大学
教育学部紀要(教育心理学科), **25**, 41-56.
- 林 文俊・津村俊充・大橋正夫 1977 顔写真による
相貌特徴と性格特性の関連構造の分析. 名古屋大
学教育学部紀要(教育心理学科), **24**, 35-42.
- Heider, F. 1946 Attitudes and cognitive organ-
ization. *Journal of Psychology*, **21**, 107-112.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal
relations*. New York: J. Wiley.
(大橋正夫訳 対人関係の心理学 1978 誠信書房.)
- 飯島婦佐子 1961 対人認知の構造についての因子分
析的研究 日本心理学会第25回大会発表論文集, 445.
- Jennings, H. H. 1950 *Leadership and isolation
: A study of personality in inter-personal re-
lations*. (2nd Ed.) New York: Longman, Green.
- Kelley, H. H. 1950 The warm-cold variable in
first impressions of persons. *Journal of
Personality*, **18**, 431-439.
- Levy, L. H., & Dugan, R. D. 1960 A constant
error approach to the study of dimensions
of social perception. *Journal of Abnormal
and Social Psychology*, **61**, 21-24.
- Moreno, J. L. 1937 *Who shall survive? :
Foundations of sociometry, group psycho-
therapy and sociodrama*. (1st Ed.) New York
: Beacon House.
- Mulaik, S. A. 1964 Are personality factors rat-
ers' conceptual factors? *Journal of Consult-
ing Psychology*, **28**, 506-511. **28**, 506-511.
- Newcomb, T. M. 1929 *The consistency of cer-
tain extrovert-introvert behavior patterns in
51 problem boys*. Teachers College, Colum-
bia University, Contributions to Education,
No.382.
- Newcomb, T. M. 1953 An approach to the study
of communicative acts. *Psychological Re-
view*, **60**, 393-404.
- Newcomb, T. M. 1961 *The acquaintance process*.
New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Newcomb, T. M. 1963 Stabilities underlying
changes in interpersonal attraction. *Journal
of Abnormal and Social Psychology*, **66**, 376
-386.
- 小川一夫・藤原 哲 1962 選択感情と対人知覚の力
動的関係(1) — Congruency Process について —.
教育・社会心理学研究, **3**, 64-68.
- 大橋正夫 1958 選択行動と対人的知覚の研究(Ⅲ)
— 関係知覚における集団構造化の要因 —. 心理学研
究, **29**, 235-245.
- 大橋正夫・平林 進・長戸啓子・吉田俊和・佐伯道治
1975 性格の印象評定における面接法と質問紙法.
名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **22**,
83-102.
- 大橋正夫・三輪弘道・平林 進・長戸啓子 1973 写
真による印象形成の研究(2) — 印象評定のための尺
度項目の選定 —. 名古屋大学教育学部紀要(教育心
理学科), **20**, 93-102.
- 大橋正夫・三輪弘道・長戸啓子・平林 進 1972a 写
真による印象形成の研究 — 序報 —. 名古屋大学教
育学部紀要(教育心理学科), **19**, 13-25.
- 大橋正夫・長戸啓子・平林 進・吉田俊和・林 文俊・
津村俊充・小川 浩 1976 相貌と性格の仮定され
た関連性(1) — 対をなす刺激人物の評定値の比較に
よる検討 —. 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学
科), **23**, 11-25.
- 大橋正夫・小川 浩・長戸啓子・長田雅喜・三輪弘道・
千野直仁 1971 パーソナリティの印象形成にお
ける情報統合過程の研究(1) — 平均モデルの予測可
能性に影響する諸要因について —. 名古屋大学教育
学部紀要(教育心理学科), **18**, 43-60.
- 大橋正夫・小川 浩・長田雅喜・千野直仁・長戸啓子・
三輪弘道・平林 進 1973 パーソナリティの印
象形成における情報統合過程の研究(3) — 面接法に
よるアプローチ —. 名古屋大学教育学部紀要(教育
心理学科), **20**, 61-76.
- 大橋正夫・長田雅喜・長戸啓子・小川 浩・千野直仁・
三輪弘道 1972b パーソナリティの印象形成にお
ける情報統合過程の研究(2) — 多刺激提示条件と単
一刺激提示条件の差異について —. 名古屋大学教育
学部紀要(教育心理学科), **19**, 27-42.
- 大橋正夫・吉田俊和・鹿内啓子・平林 進・林 文俊・
津村俊充・小川 浩 1977 相貌と性格の仮定され
た関連性(2). 名古屋大学教育学部紀要(教育心理
学科), **24**, 23-33.
- 長田雅喜・大橋正夫・三輪弘道・小川 浩 1975 言
語的情報によるパーソナリティ印象の形成 — 意味
変容の有無の検討および自由記述の分析による質的
アプローチ —. 名古屋大学教育学部紀要(教育心理
学科), **22**, 103-115.
- Passini, F. T. & Norman, W. T. 1966 A univer-

- sal conception of personality structure?
Journal of Personality and Social Psychology,
4, 44-49.
- Shweder, R. A. 1975 How relevant is an individual difference theory of personality? *Journal of Personality*, 43, 455-484.
- Tagiuri, R., Blake, R. R., & Bruner, J. S. 1953 Some determinants of the perception of positive and negative feelings in others. *Journal*

of Abnormal and Social Psychology, 48, 585-592.

- Wiest, W. M. 1965 A quantitative extension of Heider's theory of cognitive balance applied to interpersonal perception and self-esteem. *Psychological Monographs*, 79, No. 14 (Whole No. 607)

(1978年7月31日受稿)

A FOLLOW-UP STUDY ON FEMALE UNDERGRADUATES' PERSON PERCEPTION AND INTERPERSONAL RELATIONS

By

Masao OHASHI, Susumu HIRABAYASHI, Hiroshi OGAWA, Keiko SHIKANAI, Fumitoshi HAYASHI, Toshikazu YOSHIDA, and Toshimitsu TSUMURA

A large number of investigations concerning interpersonal relations or attraction have been carried out thus far. There are few, however, follow-up studies to cover considerable period beginning from its very initial stage, a well known example of which is Newcomb(1961). In the field of person perception, we can find many papers published since 1960's. A considerable portion dealt with the process of personality impression formation. Several investigators factor-analyzed the data to find out the frame-works with which persons see their unfamiliar stimulus persons, real or fictitious. There have been, however, very few papers concerned to attempts to determine its stability or changeability.

The main purpose of the present investigation is to follow-up, for several months, the interaction process of real groups to see how interpersonal relations and person perception go on there. More specifically, we aim at finding the change of interpersonal cognitive structure, if any, and its relationship with interpersonal attraction in classrooms of a women's college.

Ninety-eight freshmen, who belonged to one of the three classrooms served as Ss. They were given the following "tests" five times at intervals of some three weeks, beginning from a day four weeks after they enrolled:

- (1) Personality rating: Ss were made to rate four of their classmates, assigned at random from the filing list, on twenty seven-point bi-polar scales.
- (2) Sociometric rating: Ss were made to rate each classmate of them according to the extent to which they would like to be intimate with her. A seven-point scale was used.
- (3) Sociometric perception rating: Ss were made to estimate how each of their classmates rated them on the sociometric scale.

In addition, Ss were asked to rate themselves on the personality scale at the first session only.

Major findings obtained are as follows:

1. The factor structures of personality perception were very similar at all the five sessions. Four factors were extracted, which were interpreted as "activity", "intimacy", "attraction", and "sincerity", respectively.